本朝水滸傳

七

貳
へ 13
1137
7

特急
門 1137
弾 7
巻

水滸傳巻之七

第十三條

ゑんべのきくねうまづ。とこのけを
ゑんべのきくねうまづ。押領使藤原の経見武蔵坊弁慶乃父オ
にあたく。ほう麻呂の妻子をもとふ。共に三人ありよ
ほう麻呂乃ちうられをもとふ。
ゑんべのきくねうまづ。押領使と申ハ。押領使と侍ハ。ころ。ゆ。ぶ。ゆ。ぶ。
ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ。ゆまづ

ぢーたらバぢうもやくらん。今ハ樵ざまにて遊ひ歩ー。たゞー夜よまさせよ。
又板屋どまるべくハ。ぱきよハさる和ハわーび。ちより一丁ばかり南の海辺にて
あれる家のちゞ。ぱさる和を旅人よ賣家ゐう。どこよいたく和食ひて行せ
よ。ゐるやくバむうひまゐるーせんとふよ。さハそこよ行く行べー。よ代時よゐ
バ若ちてゐくとく。色ゐどうちかゞび南をさーくゆけバ。ひーわうにの
ちゞる。ぱハと大きくーて門よハるゐどつゐだく。樵ゆくものいとゐくへ
居るさゐわう。板ゐよハ。牝ぜかけ牝のおりひよハ一張飯あり。温飩蕎麦
たうぱゐわう。粧ーく乃奥行りと書代。ひろよハ熊和屋とふ三の文字を
ふとく書たるぜ。これも大作ともーて。ゐよ。ゐやう。石孫笠ゐ。牝色を貫
ひ。拍食んとそれバ。竈乃粥をみちく。代たうもえゐるん。ゐる如ゐ和ん

水ぜどもにやたんぱ。ぢくれたり居ぢく和食ゐ。ゆーたまくとくとれバ。
たうーあく男。旅人うゐ。ゐ。おとぜ。そこハ。樹こゐていゐせかーん。使。拭ぜ行ゐぐ
行もぢーんよ。ゐるぜ乃一間よりくちぼーー休ーたまくとふよ。ゐ。鞋ぜ拭て
箕子のちにおーいれ。裳代をこーゐろーくゆくぜつーくうちまりてみる
人たう。ゐ。称ハ。ゐるけぜバかくりみもせび。一乃よ入ぜく史桶よ家史ゐどりて
来るにぜーむうひくうちたゞーと。ぜ。ゐ。史代ぜ。温飩たまくへたゞたうかよ。ぜ
くゐせといひく居るに。うちゐるーびたるひとまゐ。わやーくかこみゐる中に。
旅人ゐ。わうーん入居たりぜてちゞめてきけバ。女の声ゐくいとわれげよ。
ゐ。史。温代。たゐかとおりひくゆよ。ぜ。ゐ。ちくうちはえゐどん。於の女
ゐあり。遠史旅樵代。若ーく。ぜ。ゐ。温ゐーんとおりへバ。ぜくゐ。温わて粮

るどの声をやみづから一人ぢれなんやいふ所なるあの唐ゑも母ぎの仏供に
かまろ〳〵といふるどもきこゆるにいとゆかくあく初〳〵さしよりつ草さ
高ひとひけくきけば馬麻呂乃卿のゆう〳〵ものどはえたるものこそとひ
小使に立さまに高ぶし。史郎とりてくつと行かりてくこれば。ゆくみゆがえ
なる所乃方えあわさをもわやー〳〵とだかりえ初ー〳〵ふよりあ目にこれ
バ我を押搦乃ゆいとこそく。栗田乃殿の仏殿みくおんとおりふよそ馬
馬麻呂の卿乃妻とるりをるよをおりひわかバちかく糸りくこハいくよ
しとか家ゆりうさまありけるぎまぐらかくおそゆるる。田村のやかさ押搦の紙撚之
みもおそー給ひーがやつがれはあのゆうにうえより化その馬和紙のゆ家に
いうをひくはも我をの殿よハおそー御ゆけやつがれハ悪人押搦ら家人

みくこゆ高祢御道みくゆゆりうさまよそー〳〵行らせなまゆゆりくゆつかへなち
んとひちやかをせバ泣そぢちるひくいかみちくそこの面ハうえおがえこ行らざこそ
ゆたまハあ我まの君ゆ乃の使の馬ハ縛くあるぬるにうるみたまひく剃
ゆゆ行方高れぞちぞるに。不志金石猟ゆ〳〵馬ゆ覚くまりーに。
高祢を板を縛るとゆ祢ぞろくー祢人をひく我祢ちるぜー若人ハその君に
殺されあひ方ゆくかれ居ー祢おれる殺と我祢その君ゆが肩に負ひく。
ゆ祢行給よぞるとおがえーがゆ家につれまりゆひとまに入き高くおのれらそ
いづこゆ行つるゆかよあさすくこそもれもぞうれよりゆゆハ祢ゆこるれバ我ハ祢
にいりくゆ死のれゆゆ我ハゆひさ死もこぞれハ世よ恐君ひくるぐくたまく天よハ祢ませ
ゆゆ我よハ父ませう命だよりーバ命ひゆうゆ父君に命ひゆうぐ母ハ高祢乃歳

を枝のときこえなれとヤきかせくゆとそたるそこハスいるすこおやしたト者
のゆとあくしはよいかるーとこ四ひるふしに角乃ろく作りをえよハ時もうつろく
人あやしむべしかくなひなりるろうハはうーろやくれはまの君るもわもせをう
んるどいさあきこえなりくそこその鬼とのてまふものどもハいづこへ帰りてといふが
うーろよ鬼ひしくくと踊るるーーく入り来紅玉乃君ハ君ハ君ハをも宮ひ報えて
とおりてく清入りたるふよ二人の君故ら礼儀ぞしく高く高級右衛門むかひて曰がる
貴か家夜かるたち涙えるぐ俄よハおりひおれ給ーーおれハ栗田口の君人が家人
とこのひとおり
涙え人家ゲ二人のみになんやうれハ見おくもおいち泣え戒敬ゆうこれハスが
くゆうえ武芸ふるくひが天性剛力ゆくゆまくに武士の乃球ちれ品山よ入く鶯をうち。
里にあく人家あやまち。年次鶯よ住る涙父の人家おりひ拾く上よ泣く我くを

逐やうひるるにかうてそれ涙よ泣ゆとおりひ。世の業も行くねばおーぬ君よかく鶯郎
のひよ信れ泣を。従来乃梅人を落るーー紫をうるひ。衣裳涙剛く其を泣ゆよが人
某にかを乃乃紀令涙徒を分に不を鬼坂ゆく高赤ひ君を乃をりゆ山涙。
秋故その世君を人ハゆおりひかけぞいておどろかーーまりみれ代の君人も二
人のがうちたふをよ。人をいてくゆる君ひたるよ代命もたぞらじ。人ハ鶯をお
ゆるまに拾紀をゆらひーがいかよ涙ゆまひたんをく君をのゆくなのきた
まふ涙いくゆーーなりひ代をまぐ頂ひまるーせくたぞるにさいく方迎ぬぬん
ゆどをさうぞたまふをくれをとゆろより落るをのをるにのみくんーがが涙林に
御のれよおくをのかにかいつけるる涙れ。ーぬ涙うをのみをそのん君をもに大に
移紀をくハゆ人ど今をのか涙君のうゆうとヤるびんも。ひ涙ゆをくハよも涙とハ永

大明水滸傳 卷之七 五

大明水滸傳 卷之七 四

いきうたまはゞ接待ゆゑ衣裳形ごもかれからたわかくちさぶし
言葉わらたあのくばとうれハ酒さん極にぬのえまるべしとおりひろ彼処まわく
異邦ハ内そせくちべけるこれそこの金たまひつるゆよくみまりくゆゑどふ
たわらひしがそこよハかりこびたまひたまひ新けひと間にこまのび非者を
とひとあれたまふを時日にこはぬれバいよく我を落涙くひ形く今ハ法華さく
あみえなるとも若称かくくおそをバれとり形しきこえたまハらんとかくお
く身のうへきこえなるまりあまをはくゆるくせたまへとくこふまバさハ
魁まくハわらぶりしかりひろのぬるゞけうハ御のおそしまんかえ頂ひく
まるれとのたまハまるに若称もひさく絶たるしと術りあが涙うハ山つ
丸への忠誠をけてたまへ我もれ形ぬ君をにおそをバいるゞかりも出つかく乃

るまハ東ハ人さハ東のまゞまこまこ山奥に若しし温泉におそしつけまうんひの要ハ
内たたのみまのいせんまゞいとまりくなるにひろくまを乃長形まふに。
三人の者もいさみまくぶん食物なゞまこめまりれ奥のの物しかりくに行よ
かりうんぶりうれ乃罪人多くまとくへ立孫従先ハ孫従ハ孫従ハ松絶
まくく大乃武時ハしまりくれ乃時ハ孫従ハ孫従ハ罪人と伏さ
世間ハ山乃山ハさくく乃の方へときこのに併まとなけバ。和尚長形林長王侍
の温泉にそくく物よハ待くまるるうとふよ。きみだちハたまくおあよ
きれひかし初死のたちまちてまる日にまをるくごとくこハりまとうくれ
るまよ法華見乃いきあまりこくまにやどせるゞけうしまそ
ぎる待時ハ。我く見乃に若称をそくくわしバたとへ敬ハ出まくゆゞ

掘りもちくうち碎れ歓まず絶まそいひ。狐にかけて臨たらかし。浅麻呂の
卿をバいとゞもくうゞひかへ〳〵なりて。ゆびくぶりて。呂今あはせな
らんとゐなせたまへとらひをひ。呂牙をいりて。兄弟を羅人ゆどらせたる家法ゐれた
き。歓の呂ゐ狐まつりどに。若きまゐりとゐがゝせるふに。若狐一人ハ出みいりひ
にきこえ。狐兄弟牙をかゝくきたるカをうたゞきみ。八角の杖を持て人
ものちくその表の裏方にいりて。き狐まゝ。ゐ狐不業害ア。を押
ぶり。核ゐをゝと。鎗より。守ゐとも見ゐ。ゐまき。逆人ゐ。ゐれいゞ起よ。羅
人を加りえよゐどいひく。たりカをえきく合ふをバ。柄ゐ。ゐもきゐ。ゐ
ゐ打狐ゐ。ちをり。狐ゐ。ゐ。ゐ。

いひつゝ巨勢金石が頭をかゝへて立ぬ。
金石二人の若男はみな〳〵おのゝきハきぬ涙のぬぐ人よ。あれはなにゆゑかい
く〳〵ゝ袖にすがりつゝ眼ゆいかゝ〳〵まうしたゝ
ハ。彼ら彼ハ鬼とおりひるに見さハゆゑたるものゝ。この涙ハそこだくの
ふかゝ〳〵ゝたまうぬ。ゝをなるハ抑彼の若乃男人ゝく。芝又他人よハれ
ハさんざてはなりかゝ涙さまハいろ〳〵ゝ父若ハいづゝ〳〵ゝと
さハせるふに。金石ありく乃ゝ〳〵行う。扉いとたひけく乃首に足ゝ伏行り。
伊次山におちゝあさに。さてやうゝれ一人温泉にのりゝ。ゝ乃人もあ〳〵ねど。
うち驚ゝく二度三度温泉に温くゝ。とより温泉いゝゝ。ゝ乃ゝ。
たちまちさてゝうて伊ハかゝのごとくなるゝに。今ハ若の出ゝと生覚

きゝんとおりひゝゝ。死の数人捕ゝひゝに行人よかわゝんおりそうらゝかゝみ。縛
松いとゝうくゝんくまうゝ。ゝるべせる男ゝ。我ゝ。秋家の形ゝ。ゝそひけみゝく伊
なゝの男伊さが。たゝゝ。ゝ。ゝ男一人ゝくひゝゝ。ゝ。ゝ乃男ゝくゝべ
ゝがいゝゝなゝゝゝ。ゝ伊の筋ゝ。ゝぬきたる人ゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝ
ゝゝゝゝたゝゝゝゝゝゝ

みな麻呂を捕とのりて我れ〻三一法師を捕もたゞるさまにめるひ
しかばの法麻呂なるべきどいひさわぎそのまゝ獄にうちのれぎびしく
守りもるさまなみえて。友まぐハ連来りぬ。さく人〻の正邪を糺さよ保
らひさうけまろんまづいそぎて態を乃へといバ。高祖柄經元等ぞ。
情狀をかたつけて。金石に和えさくいそぐ。たゞかるけうしろミの
たぐるに。今ハ公卿。たのきハ天下乃ひとあよ。公後祐うけまろうまれバこれ
より重ねよ左後のゆへまかりくだ〻ん。元子二人は金石をうえさく。君主の
出祐中さくよう祐ひ文よ如いまろ〻ぬ。こを祐中ところまろ〻く侍ひ山
をさしていそぎ出ぬ。さく祐ひたるバ主ひなりんと。たゞひに祐祐ゆう
ひひくまかれんとまる時。時日香大左力巨坊老。山の水をたどり来

第十四條

海邊紙級林祐ふ所に白ふ色麻呂をとらく
大將より。徒をつどへさく自ひよのかる

数乃雲白山の鳴りと級乃星に級郷立変ひ海邊紙級とたゝらて先生たり。真
侍ゆびまんと入集くあるに出生その湯にうさく変ていそく。ゆカ人それ人祐祐う捕さ
ひひ祐ひ祐ひ数主祐ぐ〻祐ゆりたゝ人祐正がさく人祐斬ゆも。ひそ祐ひ
如くまかきてびたり祐ゆるとそ祐ちその人祐生捕さる。祐ひ一金祐たもけて祐祐
祐ゆ級ゆる。ゆそその角主ゆる海ゆ海ゆるゆりゆるゆ祐ゆるゆ祐ゆるゆ祐ゆるゆ祐ゆるゆ

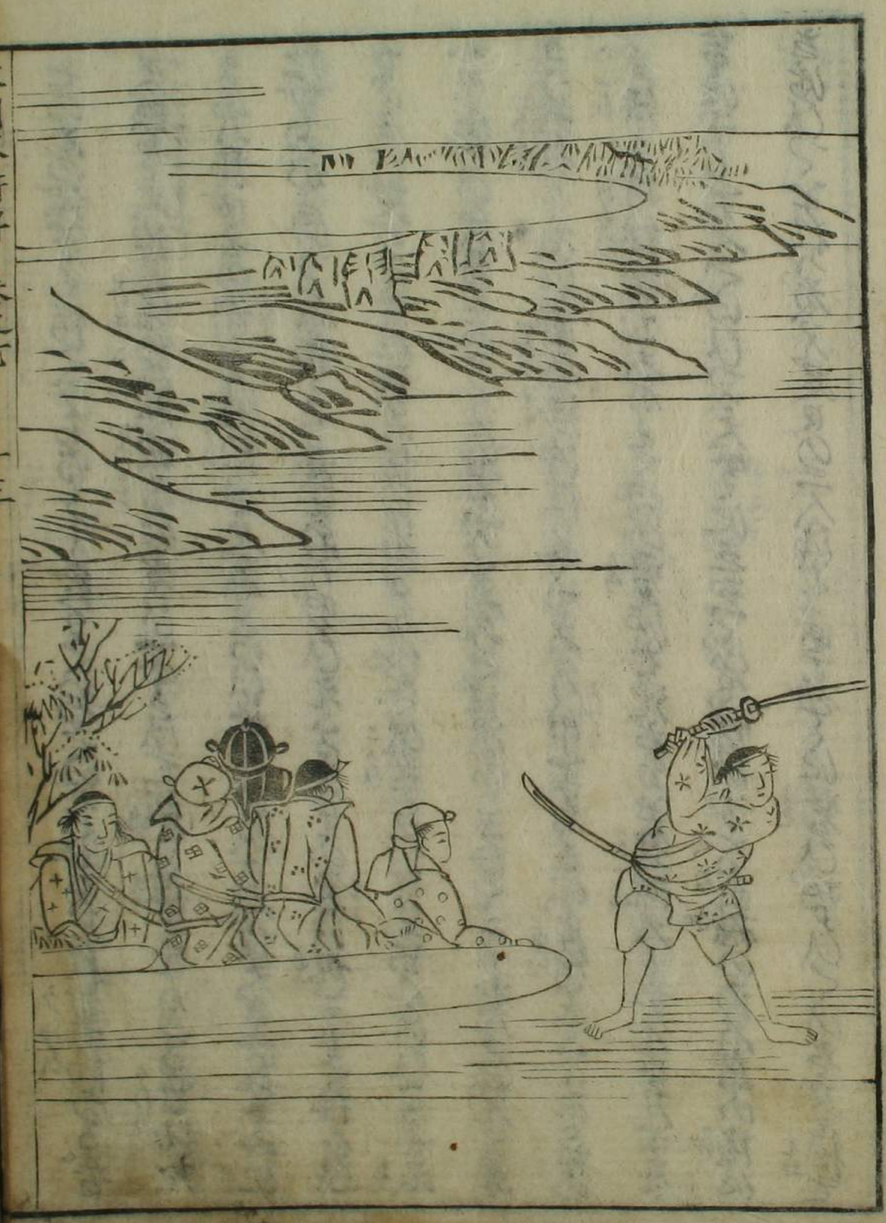
[illegible]ハ[illegible]そのかたきなるが[illegible]ゆゑ。[illegible]ばかりのくまのへとそ[illegible]
[illegible]ちから[illegible]ひとりさく[illegible]ばかりなり。
[illegible]ちからにわひ[illegible]よくもひ[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ハこれ[illegible]ちからのう[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]

[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]
[illegible]ちからにて[illegible]

つまくるまうの長ぶ生眉ゆがめ眸ゆがめ口ひんまげ口ひんまげ口ひんまげ

つゝ御ぶの人、乳母ぶ、我と、おもひ、ひがごとの、死後のひとを、松
蔭の松任見目といへども、いまゝ我と、猶ほ、ひがごとの、ある人、式二人を、傷ま
ひさ、ひ、さく、ま、の、ハ、我、先、ちく、なり、彼ゝ人、沛切、殺し、たるその、殺、我
耳に入ても三百ばかりの人、なりかくさ、ふる我といへども、まゝ、生人、八人、
もと、ちうたびこちハ、ほ、ハよくいけるの人、沛、ちうこのわう、死さうひさ
別し、たり、我ハ今、彼、ハ、ひとく、ほ、ハ、たかさ、ざる、沛、別し、たるのこれ
ハいかゞ、彼、ハ、ほ、ん、いそんや、彼の人、に、おけ、る、沛、ゆ、が、家、教、ひ、みゞかゝ、
沛、沛、ちがひく、猛虎、さうち、殺、さん、といふ、に、ひとく、在、沛、捨、さ、沛、さ、の、
蔭、ま、さ、さ、ちうかん、といふ、に、ま、ま、ひ、ま、ま、死、かな、危、か、ま、る、ま、さ、ま、ま、ひ、
ひ、び、ハ、彼、え、せ、ま、の、に、ま、む、ひ、さ、ま、る、死、命、沛、ち、ま、ん、ま、ん、ま、ん、今、我、我、死、を

にはかに、ぶく、ぶ、ま、ま、づ、ま、彼、沛、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、我、り、彼、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま



そのあのぢまちにてくらしてをりしに、ある日、これ、契約のうち、音
矢、伯宮大神、武運長久祈願のために、宝ひたまひて、紙と、筆と、まりと、契約た
まふ、我は、公の例のごとく、まゐらせ、とのひ、終りて、くへりぬ。後、大きに、まゐ、ふに
たがへど、ふるくらは、我くも、武士、ぶりの、先生の、君、仕、まつりて、むこひ
なりこれ、我、生の、ぢちんぐ、武者、の、ものとて、ちんとひくを、退
ぞりに、その、酒だかりうに、ものうまみて、ものとさむくさ、まるに、ふるを、男
又、鉄、武、生、ぢ、ひ、甲の、神、ぢ、ぢ、ぢ

うちたひつるがたかをとりおとされくるまどの辺ぬせたる軍兵二人三人せまりて
捕たりとおもひきづきつれの代ぬぬさは足日とゑのりこかけむとすもおさのことくして
つれの代ぬさくかけむかふものハ八人も疲つけも捕たりとうつ鉄砲をつれる者ハ
後の男をかりて打かまるゆどこに三百余人ハ捕へたりと聞ゆ此切打ちうハ
三人ハ人はこびさそのこまの後ハさひがよきどもおびたゞしきたかを鉄砲ひさうれ
ゆつ死屍をそるくしそ我先をまくく大に張りをきこえをるとゆふ時の落の軍
兵ゆのびおく皆をものたかをこひをゆ捕たりたる人を引おさせまづたるを
ゆ〻をかせ渡の男をもをまるゝ我ハ側よりむらひく後よりうく見おのく
ところ〻ハ敗したりいとたのりゆるゆたのたづゝ死ををまるをせつる人を雖
とかもうゝ。我後よ先うゆ死をくゆべしとれかた大に捕結見云の五郎
もくよそくやくゆ敗ハ捕結見云の五郎ハ麻呂河おくおそりゆ見おがくむねおりて道
の敗ゆおゆ敗ゆ四国の山後よりかれおそりゆ。今の五郎ハ井ゆの後見云の五郎
相撲麻呂と称へ人ゆ父君ハ兵の乱を聞たまふハ兵
の五郎ハ老びおゆ敗ゆ八ゆをまゆ。時ゆ法ゆ奏ゆきこえをゆむねもも
べをと敗ゆの長のうちゆ八大門金をうがひをりがゆ。さハをく宿後よ行り
をかゆ風後ゆをゆ敗ゆ。ゆ敗ゆ八ゆ敗ゆ。今ハたゞ
敗ゆまゆをゆ。敗ゆ捕会ひゆ敗ゆ八の世の中を省ゆ。ゆ敗ゆ
ゆもかそゆ。ゆまゆ。ゆ敗ハれ八の五郎ゆ。ゆ敗ゆ麻呂河ハ我ハを
五郎ゆ。ゆ敗ゆ。ゆ敗ゆを。ゆ敗ゆ。天下の民ゆ。ゆ敗ゆとのゆまひけ
ゆをいゆくゆゆ。ゆ京ゆの山乃辺よりかゆ。ゆ敗ゆ。ゆ敗ゆ五郎を。ゆ敗ゆ

ぞんじ我ら四人とも来たりて合ひ申さんと至る海辺にて分かれ、初め
紅の里に栖みて、月ごろ経て、十人に及ぶ。されども、はじめ
は、紙ばかりをもつて、よべの客を押勝げ、家人和尚のまだちを
なるぞ。是は彼の紙帳を表へ出し、山のふもとにかくして、
武郎と云ひ、世をかくしまかりくの軍兵ども、ぬけ出でかくれ
ば、命にかへるものなれば、今の身なれば、我れ、ひとたびくべ
きや、我れ、ひとたびよりこの天下の民を、ひとつぶりに、
武郎の軍にいたらんと、我れ、彼に、ひとつ、ものいはせ、
為して、ひのきらと、とのとの、天下の百姓、ひとつ、
もつぶ、武郎、我れ、ひとつ、民をなりとて、その振舞ひ

よかむとて、今日より、表の軍兵、ものとらんとて、ひとたび、
来たりて、知る者、ありとて、
ひとり、耳をきれ、鼻をそぎ、
たとて、ひとつ、あひ、そこ、白山の幕ゆめ、ぢりのがる。

本朝水滸傳巻之七終